

「それぞれの道へ」

「仲良きことは美しきかな」と書いたのは、詩人で画家の武者小路実篤さんでした。この格言は、人道主義・理想主義を掲げる「白樺派」という文学一派を創設した武者小路実篤の思想を端的に表すものであると言われています。戦争のニュースを見聞きしたり、子ども達の喧嘩に接したりする度に、「仲良くする」ことの重要性、もとい有り難さを痛感します。教会学校や幼稚園でも、聖書から拾い上げるメッセージは、多くの場合、隣人愛を土台とした「平和」や「仲良し」がメインテーマになります。子ども達にとって分かりやすく、また大切にしてもらいたいお約束が「平和」であり「仲良し」だからです。その共通理解が、人類社会の基盤であると、私を含め、多くの人たちが納得しているからだ、私は思っています。

一方で、そういうキレイなメッセージでは覆い隠すことのできない現実もあります。例えば、私の両親は骨肉の争いとまでは行かないまでも、ある程度の葛藤を経て離婚しています。そして、その離婚を巡る話し合いの際に、もしも「仲良きことは美しきかな」という理想論を誰かから押し付けられ、両者互いに言い包められ我慢を強いられたなら。多分、両親のどちらかは精神的に参って、取り返しのつかないことになったことでしょう。かれこれ1ヶ月ほど前に、父親はバイクに乗って敦賀に遊びに来ました。先週は夏季休暇を頂きましたので、母親の住む私の実家に楽しく帰省することができました。ある意味、そういう平和な現状を保っているのは、私の両親が離婚してくれたお陰と思っています。

もちろん、避けることのできる離婚は避けた方がいいですけどね。離婚は結婚する以上に大変だと言いますし、若い子どもがいる場合には、子どもにとって不安や心配が無いに越したことは

ありません。

ただ、確立した一個の人格を持つ大人同士が、それぞれの人生において自分の希望や幸せを追い求める中で、どうしても折り合いがつかず、衝突してしまうのは、仕方のないことです。誰であれ、他人のために生きるわけではありませんし、自分の幸福を追求する権利を有しています。

また、結婚に限って言えば、キリスト教において、結婚は「神様が結び合わせたもの」であると理解されます。だから、人の都合や思いで、それを解いてしまうのは悪いことであるとも考えられています。でも、もしかしたら、神様が私たちの人生に介入して、生涯の伴侶を得させてくださるなら、神様が私たちの人生に介入して、生涯の伴侶を引き離すことも有り得るのではなかろうか、と解釈することもできます。「神様が結び合わせたものを、人が解くことはできないが、神様御自身が解かれるかも知れない」。それも、ある意味で、神様の御前にあって自らの無力さと限界を認める謙虚な信仰理解であると言えるでしょう。もしも離別の瀬戸際にあつて、それを乗り越えられたなら、掛け値なしで素晴らしいこと。神様と共に勝ち得た幸いと言えるでしょう。でも、その幸いに至れない現実と、その御心が示された方々がいることは、考慮しないといけません。

しかし、お互いの幸福や考え方を尊重し、別々の道を歩んだ先にも、それなりの穏やか未来があるのかも知れないってことは、期待して良いと思います。私の子ども達も、じいじとばあばが何故かしら別々に住んでいるとか、その事情は良く分かっていないでしょうが、でも、じいじのことも、ばあばのことも大好きで、いつも会えるのを楽しみにしています。むしろ、じいじに会えて嬉しい時と、ばあばに会えて嬉しい時と、タイミングが分散されているので、二度美味しい的な感覚なのかも知れません。人生、そういう成り行き、言い換えるなら、神様の導きもあるでしょう、きっと。

とまあ、「仲良きことは美しきかな」という人間的倫理観や幸福観から見ると、すぐには納得できない離別、不仲が、しかし翻って誰かの笑顔や幸せに繋がるという現実を、少なくとも私は認めざるを得ないと思っています。そして、今日の聖書箇所も、離別や不仲を、称賛はしないまでも、まあ、そういうこともあるよねと。隣人愛を標榜する教会や信仰者同士であっても、そういうことってあるよねと、そう認めざるを得ない現実を伝えつつ、その先にある希望を示しています。

先ほどは、私の両親を引き合いに出した離婚の話をしましたが、現代の教会についても、こんな実例があります。私が、大学院生の時に関わりのあったある教会は、礼拝堂に立派なパイプオルガンを導入することを巡って、教会員の中に深刻な意見対立が生じました。昨今話題の東洋大学を卒業したのかどうかという話ではありませんが、その教会にも差出人不明の怪文書が飛び出したりして、かなり不穏な状況になりました。そして、結果的に、パイプオルガン導入に反対していた一部の教会員が転会という形で、その教会を離れることになり、ようやく落ち着きを取り戻しました。ちなみに、このオルガン騒動が起こった教会も、私たちと同じ会衆主義でした。教会員の民主的な合議と総意によって意思決定をしていく教会だったんですね。牧師や役員の一存で物事が決まっていくわけじゃないからこそ、オルガンの導入とか大きな事業の際には、教会員同士の誠実かつ真剣な意見対立は避けることのできないものです。むしろ、神様の御前に立つ一人一人が自分の考えを持って建設的な議論を交わすことは、生きた教会を築き上げる上で無くてはならないことだと私は考えています。だから、このオルガン騒動が起こった教会が経験した一連の出来事は、称賛はできないし、そうなりたいとも全然思えないけれど、でも、教会員一人一人が一生懸命に教会のことを考えた結果として受け入れる他無いのだろうと思います。それぞれ別々の道を神様が備え、整えてくださったのだと祈りの内に受け止めて、両者互いの新しい礼拝

と賛美の日々を願い求めることが、私たちに赦された信仰の道であると言えます。

今日の聖書箇所には、熱烈な宣教者であるパウロさんと、「慰めの子」という意味の名前を持つバルナバさんとの和解し難い決裂の出来事が書かれています。この両者が分かり合えず、別々の道を歩み出したのは、一度宣教旅行から離脱したマルコさんを巡って、熱烈な性格の持ち主と、慰めという優しさを持った人との不仲が原因であるという、そんな単純な話ではありませんでした。同じ使徒言行録 9 章 26 節から 28 節には、当初、キリスト者たちを迫害する側だったパウロさんが、エルサレムの使徒たちに受け入れられないという状況が報告されています。それは、まあ、当然のことで、先日まで熱心にキリスト教狩りを行っていた人物を、いくら回心体験を経たと言われても、スッとは歓迎できないのは仕方のないことです。しかし、そんなパウロさんに対する疑いが晴れない中で、バルナバさんだけはパウロさんのことを信じ抜いて、使徒たちとの仲介を買って出たんですね。慰めの子と呼ばれるバルナバさんらしい、非常に寛容で優しさの溢れる振る舞いであると言えます。だから、パウロさんにとって、バルナバさんと言うのは、良き理解者、恩人と言っても良いくらいの人なんですよね。しかし、今日の聖書箇所では、そんな自分自身も助けられた寛容さを、宣教旅行から離脱したマルコさんにも示そうとするバルナバさんに対して、パウロさんは納得できず、「意見が激しく衝突し、彼らはついに別行動をとるようになった」というわけでした。「恩を仇で返す」とは行かないまでも、パウロさんの宣教に向ける激しく一切の妥協を許さない厳しい態度が、ここには滲み出ていると言えるでしょう。そして、バルナバさんにしても、ただ優しく寛容なわけではなく、その優しさや寛容さが否定される時には、はっきりと対立することを厭わず、毅然とした態度で自らの信仰姿勢を貫く強さがあったのだと言えます。

隣人愛や和合を説くのがキリスト教です。しかし、聖書には、このように不仲や決別の出来事も

臆せず収録されている事実は、個人的には凄いことだと思っています。このパウロさんとバルナバさんのお別れのお話は、聖書のメッセージを損なうのではなく、より深めるものです。神様の導かれる信仰とは、人間から見た表面的な一致や統一に留まるものではなく、衝突や対立を経ながらも尚、続いていく力強さと懐の深さがあります。神様はパウロさんとバルナバさんの不仲さえも用いて、世界宣教の扉を開かれたのだ、と理解することができます。経験豊かな両者が、それぞれに新しい同伴者を得て、かたやキプロス島へと向かい、かたやシリア州やキリキア州に向かい、単純計算で2倍の宣教活動を実践することになったわけです。それは、聖書的にも、また神様の御心に照らしても、否定されたり、非難されたりするものではなく、それぞれが真剣に聖書と神様に向き合う中で決断した道であるとして、肯定的に捉えることができるものです。

もちろん、仲良く、いつも柔和に、笑顔で、手を取り合って過ごすことも大事です。ただ、忘れない視点は、その平和な状況が、誰か一人の、あるいは一部の人たちの我慢によって成り立っているなら、それは歪な平和であるということです。その歪な平和を已む無しとして見逃したり、我慢したりする自由も、私たちには与えられていますが、衝突や対立の中にも御心が示されることがあると知って、神様に委ねる気持ちで、それぞれが真剣に意見を交わすことも、時には重要であると言えます。神様の御前にあって、優れている劣っているという順位や、古いとか新しいという序列は意味を為しません。神様に等しく招かれている者として、対等な立場から声を上げること、譲れぬ思いを伝えることを妨げられたりはしないということです。

ところで、パウロさんとバルナバさんが、別れた後の展開についても、少し触れたいと思います。使徒言行録自体はこの後パウロさんの活動に焦点を当てるため、バルナバさんの動向については窺い知ることができません。しかし、パウロさんが書いた後年の手紙からは、両者の関係回復を認められるような記述が散見されます。例えば、フィレモンへの手紙では、マルコさん及び

バルナバさんも宣教の同労者として挨拶に名を連ねていますし、晩年の執筆であるテモテへの手紙二4章では「マルコを連れて来てください。彼はわたしの務めをよく助けてくれるからです」と記しています。これらは、パウロさんが後にマルコさんを協力者として認めたこと、またバルナバさんとも和解し、共働していた可能性を示しています。パウロさんと対立してでも、マルコさんを宣教に連れ出したかったバルナバさんには人を見る目があったと言えますし、パウロさんにしても晩年には若い伝道者たちを「自分の子」のように愛し励ます柔和さを持つようになりました。このことは、パウロさんが宣教者として霊的成熟を遂げた証でもあります。この両者が対立と離別を経て、それぞれ成長し、最終的には福音宣教において和解し、合流したであろうという結末は、現代の教会における対立が一時的なものであり得ること、最終的には福音による和解がもたらされ得ることを示唆していると言えるでしょう。

大事なのは、私たちは主の御前において対等であり、尊重されるべき人格を備えていて、誰からも強制を受ける謂れは無いということ。また、その確信に基づく対立や衝突は、時に已む得ないものであり、むしろ、その対立や衝突を経て成長し、新たな気づきに至る可能性もあります。そして、これが一番大事だと思うのですが、どんなことにも主の御手が及んでいるのであり、対立や衝突という目に見える現実の、はるか先には神様しか知らない福音の結実が有り得るということです。そのような主の御心を信頼する姿勢、主に委ねる信仰を忘れないことで、私たちは私たちの力だけでは成し得ない和解や平和を、いつの日か実現できるのかも知れません。

だからこそ、どうしても意見が合わず、もう色んな意味で無理かな、と思えるような相手がいたとしても、それでも「主の平和がありますように」と祈り合える信仰者でありたいと思います。一致に至らず、それぞれの道を歩むとしても、それぞれの道に等しく神様の祝福が注がれることを知って、いずれ導きのままに和解できる未来があると信じて、憎まず、恨まず、主に委ねる気持

ちで歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も、様々な背景があり、事情があり、日常がある私たちを等しく、この礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたが与えてくださった聖書には、人と人が分かり合えず、衝突の果てに別々の道へと進んでいくことが隠さず述べられています。それは、信仰について真剣であるが故に意見が対立し、時に自力では修復不可能なほどに仲違いすることのある私たちへの慰めであり、励ましであります。どうか、主にある一致を目指しつつ、なかなかそこに至れない私たち一人ひとりのことを支え、導いてください。たとえ選び取る道が異なるとしても、あなたへ祈りを捧げるという一点においてはブレず、違わず、祈り合う関係を、全てのキリスト者と結び続けることができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。